

音楽ワークショップ型授業がもたらす効果

—アンケート及び半構造化面接調査に基づく量・質的分析—

小野隆洋・岩中貴裕*・上村有平

The Effects of Music Workshop-Style Classes: Quantitative and Qualitative Analysis Based on Questionnaire Survey and Semi-structured Interview Survey Results

ONO Takahiro・IWANAKA Takahiro・UEMURA Yuhei

1. はじめに

(1) 研究背景

音楽ワークショップ型授業とは、文化庁が主催する「文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）」の一環として、全国の小学校・中学校・高等学校で実施される音楽アウトリーチ活動に基づく授業形式である。この事業では、音楽、演劇、舞踊など多岐にわたる芸術分野の専門家が学校現場に派遣され、児童・生徒に芸術的な体験を提供することを目的としている。こうした活動は、芸術を通じた感性の育成や創造的思考の促進をめざしており、特に音楽ワークショップ型授業は、単なる鑑賞に留まらず、児童・生徒が主体的に学びに関わる点で特徴的である。

本研究の第一筆者は、音楽演奏家として20年以上にわたりこの派遣事業に従事し、全国各地で多くの音楽ワークショップ型授業を実施してきた。その実践経験を通じて、本授業が教育的に果たす意義の大きさと、児童・生徒の内面的な変化に深く関わっていることを実感し、これを体系的に検証する必要性を感じたことが本研究の着想に繋がった。

音楽ワークショップ型授業は、児童・生徒の主体性を重視し、双方向的なコミュニケーションを通じて学びを深めることを目的とする授業形態である。教師が一方向的に知識を伝達する形式とは異なり、学習者が能動的に参加し、実際の体験を通じて学びを得ることに主眼を置いている。この授業形態の具体的な特徴として、以下の3点が挙げられる。

- ① 体験重視のアプローチ：学習者は楽器の演奏、即興演奏、グループ活動など、実際の音楽体験を通じて学ぶ。
- ② 教師と子ども、子ども同士が意見を交換し、相互に学び合うことで学習が深化する。
- ③ 柔軟性のあるカリキュラム：固定的な授業計画に縛られず、子どもの反応や興味に応じて内容を柔軟に調整できる。

これらの特徴を備えたワークショップ型授業は、子どもの音楽的感性や表現力を育むだけでなく、音楽を媒介としたコミュニケーション能力の向上にも大きく貢献すると考えられる。

* 山口県立大学教授

(2) 研究目的

本研究では、音楽ワークショップ型授業において、プロの音楽演奏を鑑賞した小学生2,251人を対象に質問紙によるアンケート調査を実施するとともに、実施校教員7人およびプロの音楽家5人に対して半構造化面接調査を行った。この調査の目的は、児童が鑑賞活動を通じて得た学びと、音楽に対する態度変容との関連性を明らかにすることである。特に、プロの音楽家による生演奏が児童の感受性や音楽への興味をどのように高めるのか、また音楽的態度や行動の変化にどのような影響を及ぼすのかについて、アンケート結果の分析を基に考察を行った。

アンケート調査の量的分析およびその考察については、小野・岩中(2024)¹⁾で既に報告しているため、本論ではアンケート調査における自由記述部分に焦点を当て、質的分析を実施する。この質的分析を通じて、児童の具体的な感想や反応を引き出し、音楽ワークショップ型授業の効果に関する包括的な理解を試みる。

また、本研究では、これまでに構築した音楽ワークショップ型授業の効果を示す仮説モデルの妥当性を検証することを主要な課題の一つとしている。この仮説モデルは、音楽ワークショップ型授業が児童に与える影響を多角的に分析し、それぞれの要素間の相互関係を理論的に説明するものである。本研究では、アンケート結果や面接データの分析結果を用い、このモデルが実際の教育現場にどの程度適合するかを評価するとともに、必要に応じてモデルの修正や発展を図る。

さらに、本研究では、音楽ワークショップ型授業の特徴である「短期集中型の学習形態」に注目する。この授業形態は、限られた時間内で児童の関心や集中力を最大限に引き出し、短期間で深い学びを実現することを目的としている。本研究では、この短期集中型授業が児童に与える影響を多角的に分析し、その教育的意義を明らかにする。

以上のように、本研究は音楽ワークショップ型授業が児童に与える教育効果を総合的に解明することを目的とし、その成果が今後の音楽教育の実践や授業設計にどのように貢献できるかを探るものである。

2. 先行研究

(1) 音楽ワークショップ型授業の現状

近年、講義形式の一方的な知識伝達ではなく、参加者が主体的かつ協働的に学ぶことを重視したワークショップ型授業が注目されている(中野,2001)²⁾。特に、音楽に触れることで子どもの内面に様々な気づきや変容が生じることが指摘されており(宮原,2009)³⁾、音楽ワークショップ型授業の教育的意義が期待されている。一方で、この授業形態の効果に関する研究知見の蓄積は十分ではない。その理由として、音楽アウトリーチ実践に関する研究が乏しく、経験則に基づく評価が主流であることが挙げられる。また、教育的意義が不明確なままワークショップ型授業が乱発され、教育現場に混乱を招いているとの指摘もある(新原,2017)⁴⁾。

さらに、林(2002)⁵⁾は、アウトリーチ活動を行う音楽家に「子どもを前にした経験が乏しい」という問題があると述べている。このような背景から、音楽ワークショップ型授業の効果(教育的意義)を明らかにし、その効果が発現するメカニズムを解明することが喫緊の課題である。

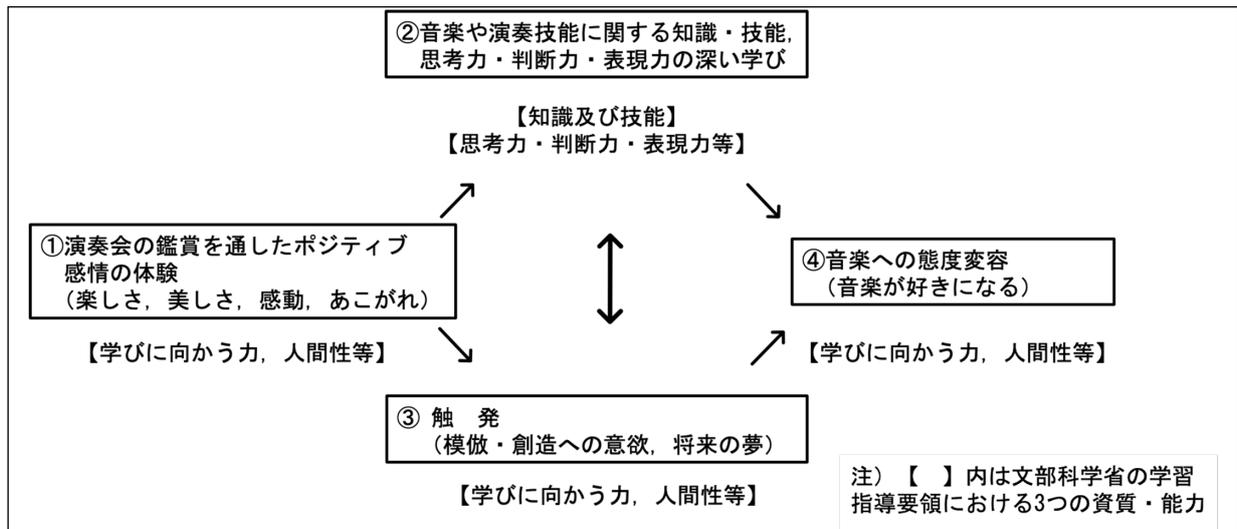
一方で、河添・小川(2010)⁶⁾は、インタラクティブな授業構成が豊かな感性を培う音楽教育において欠かせない要素であると指摘している。また、坪井(2018)⁷⁾はワークショップ型授業における鑑賞活動と表現活動の相互関係を検討し、これらの連携が教育効果を高める可能性を示している。さらに、新原(2017)⁴⁾は、音楽家と子どもの相互行為に焦点を当て、ワークショップ型授業の実践的な側面を論じている。

上村・小野(2021)⁸⁾は、プロの演奏を鑑賞し、楽しい体験をクラスメイトと共有することで、知識や技能、思考・判断・表現力などの学びと、子どもの表現活動が相互作用することを指摘し

ている。この相互作用を通じて、子どもの音楽に対する態度が変容し、「もっと上手になりたい」という意欲が高まり、自発的な学びへと繋がることを主張している。また、これらの学びと態度変容のプロセスが音楽的な人間性を形成する要因として重要であることが強調されている。

図1は、上村・小野（2021）⁸⁾で音楽ワークショップ型授業に参加した児童の感想文を分析し、効果の相互関係をもとに構築した仮説モデルである。このモデルは、音楽ワークショップ型授業が児童に与える多面的な効果を理論的に説明し、教育現場における授業改善に向けた指針を提供するものである。このような研究知見の積み重ねを通じて、音楽ワークショップ型授業が子どもたちに与える心理的・社会的な影響を多角的に捉えることが可能となり、教育的意義をより実証的に検証する基盤が構築されつつある。

図1 音楽ワークショップ型授業の効果の相互関係（上村・小野, 2021, p.24）児童の自由記述データを基にしたモデル



(2) ティーチング・アーティストの役割

音楽ワークショップ型授業を効果的に機能させるためには、Booth(2009)⁹⁾が提唱する「ティーチング・アーティスト (Teaching Artist, 以下TA)」の概念が有用な視点を提供する。Booth(2009)は、「知識」と「体験」を有機的に結びつけ、体験を伴いながら学びを深めることの重要性を指摘している。一方で、久保田(2019)¹⁰⁾は、TAを「教える芸術家」と直訳し、「芸術を教えるだけでなく、芸術を通して人を教育することを仕事とする人」と定義している。この定義からは、TAには高度な演奏スキルに加え、教育スキルも必要不可欠であることが示唆される。

この視点は、アウトリーチ活動において、いかに優れた演奏技術を持つ音楽家であっても、教育スキルが不足している場合、教育的効果を十分に引き出せない可能性があることを意味している。そのため、TAの存在は音楽ワークショップ型授業の成否を左右する重要な要素である。

Booth(2009)は、TAの主要な役割として、学習者が芸術作品と個人的に重要な関係を築けるよう支援することを挙げている。特に音楽鑑賞活動では、参加者が作品と自己を関連付ける手助けを行うべきであり、その鍵となるのが「エントリーポイント」という概念である。

エントリーポイントとは、学習者が芸術的な体験にアクセスするための入口やきっかけを指す。Boothは、多様な学習者がそれぞれの興味や経験、スキルに基づいて芸術に触れられるよう、複数のエントリーポイントを設ける必要性を強調している。これにより、学習者は自分に合った方法で芸術にアプローチし、深い学びが可能になる。

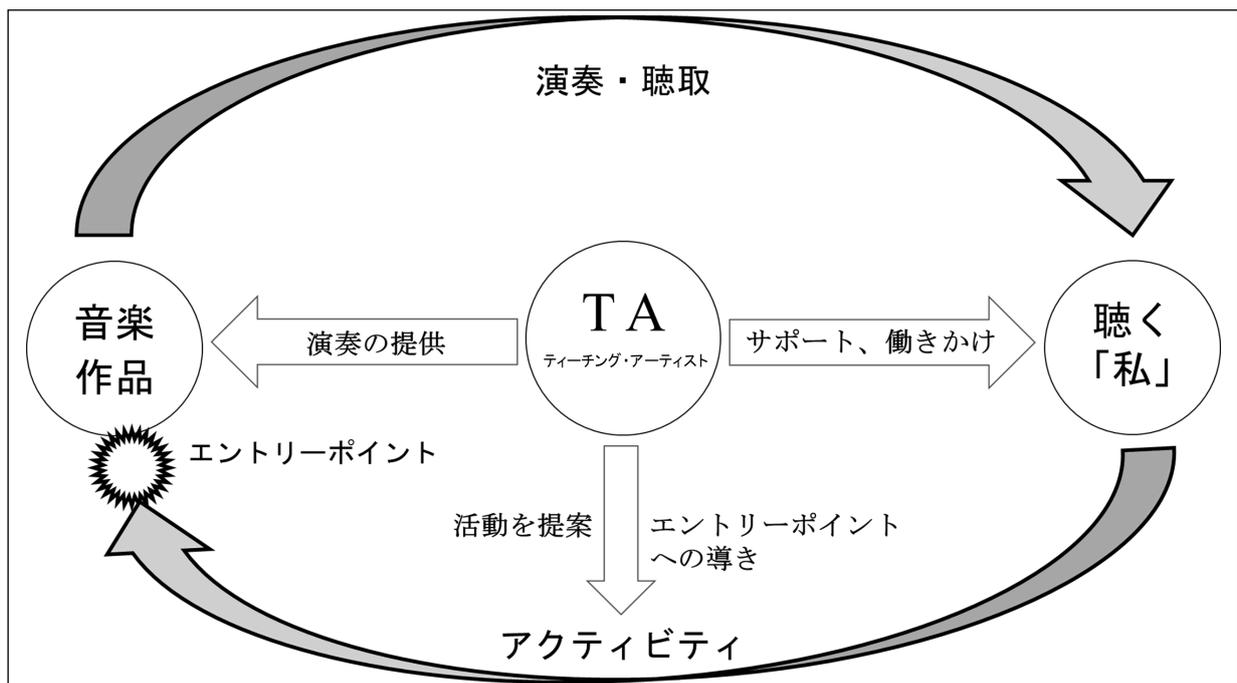
エントリーポイントには、身体的、視覚的、聴覚的、言語的、感情的といった様々な切り口があり、鑑賞者が作品との関係性を見出すきっかけを提供し、興味を引き出す役割を果たす。例え

ば、これから鑑賞する楽曲について「どの部分が特に印象的か」など、具体的な視点を与えることで、学習者は自然に音楽へ引き込まれ、「もっと聴きたい」という感情が引き出される。

エントリーポイントへ導くためには、事前に行う「アクティビティ」が重要である。アクティビティとは、芸術的な体験を実現するための具体的な活動であり、TAは学習者の創造的なプロセスを促進するために、目的に応じたアクティビティを設計する。例えば、金管楽器の音が出る仕組みを学ぶ際には、児童が自ら唇の振動を体験する活動や、楽曲の拍子を変更する前に手でリズムを叩く活動が考えられる。このようなアクティビティは、学習者の体験を通して知識を深め、表現力や理解を向上させるのである。

このように、エントリーポイントとアクティビティを組み合わせることで、学習者は芸術作品と個人的なつながりを築きやすくなり、音楽ワークショップ型授業の効果を最大限に引き出すことができる。図2では、学習者を支援するプロセスが視覚的に示されており、これにはTAによる学習者へのサポートや指導、目的に応じた活動の提案と実行、芸術作品や活動にアクセスするためのエントリーポイントの提供、さらにエントリーポイントを通じて芸術作品と深く関わり、内面的な理解や新たな気づきを得る深い学びへの発展といった要素が含まれる。このプロセス全体が有機的に結びつくことで、学習者が主体的かつ積極的に芸術に関与できるようになり、音楽ワークショップ型授業が学習者にもたらす深い学びのメカニズムを具体的に示している。

図2 TAの活動の目的（久保田,2019,p.24を参考に筆者が作成）学習プロセスの支援



(3) エントリーポイントの設定

本研究では前述したBooth (2009) の理論に基づき、音楽ワークショップ型授業を実践する音楽家をティーチング・アーティスト (TA) として位置づけた。TAは、芸術作品と児童 (学習者) が個別に関わりを持つことができるよう、以下のエントリーポイントを設定した (表1)。表には、具体的な実施内容と、図1で示す音楽ワークショップ型授業の効果との相互関係に対応付けて記載している。

エントリーポイントの設定にあたっては、各学年の学習指導要領に基づく学習課題を踏まえ、音楽科の授業との関連性を重視し、実施校の教員とTAが事前に綿密な打ち合わせを行った。打

ち合わせでは、各学年の音楽授業の実施状況、既習曲・未習曲、年間指導計画などについてヒアリングを実施し、これらの情報を基に、教員と連携しながら音楽ワークショップ型授業の具体的内容を協議・立案した。

表1 エントリーポイントを設定した音楽ワークショップ型授業の内容 (小野・岩中,2024,p44)

	実施プログラムの 具体的内容	エントリーポイントの設定	エントリーポイントへの導き	図1と の対応
a	各学年に応じたプログラムの鑑賞活動： ▶トロンボーン ▶声楽 ▶ピアノ ▶フルート	演奏はステージ上ではなく、児童と <u>同じフロア</u> で実施	表現者と鑑賞者が <u>同一空間</u> かつ身近な距離感（自分の学校に来てくれた、同じ時空間を共有している）	①
		各学年の教科書教材において、演奏経験または鑑賞経験を有する <u>既習楽曲</u> の鑑賞	自身の経験との結びつき（やったことがある、 <u>知っている</u> ）	②
	▶打楽器 ▶マリンバ ▶鍵盤ハーモニカ ▶リコーダー	楽器を伴わない「歌唱」、児童にとって最も <u>身近な楽器</u> である「鍵盤ハーモニカ」や「リコーダー」を使用	児童が所有する楽器と同等機種の楽器（自分と <u>同じ楽器</u> を使っている）	③
b	鑑賞曲目が作曲された経緯や、その作曲者にまつわるエピソードの紹介	世界地図を用いて、作曲者が生まれた国の位置を確認（自分のいる場所との位置関係、 <u>距離感</u> の確認）	自分と作曲者の地点が一枚の地図上に描かれている（地球を媒介とした <u>一体感</u> ）	②
		作曲者の活躍した時代の日本の様子を振り返ることで、各自が時空間を <u>想像</u>	時代背景が明らかになる（自国の時代背景によって、現在を起点とした過去の <u>認識</u> ）	②
		作曲者の写真を提示することによる人物像の <u>把握</u>	作曲者への親しみ（ <u>親近感</u> ）	②
c	音の出る仕組み、演奏方法に関する解説 ▶管打楽器 ▶鍵盤ハーモニカ ▶リコーダー	仕組みを理解することで、演奏に対する興味を <u>触発</u> 、演奏技術の知識習得による模倣意欲の <u>誘発</u>	実践を目の当たりにすることによるひらめき（わかった、自分もやってみたい、 <u>やってみよう</u> 、真似してみよう）	②③
d	児童による管楽器、打楽器の演奏体験学習	未経験者による演奏の実体験で得られる <u>感動</u>	経験することで得られる <u>達成感</u> （できた）	①③
e	音楽家に対する児童からの質問への応答	専門知識の理解、自己表現の方法理解	疑問の解決 創造への意欲、 <u>自己実現</u> への動機づけ	①②③
f	発声指導、及び教科書教材を題材とした楽曲の歌唱指導	質の高い音楽技術の提供、高度な技能の習得、 <u>模倣意欲</u> の <u>誘発</u> 、美意識の触発	技術の上達による満足感、達成感から得られる <u>自己肯定感</u> の向上	②③
g	音楽祭等に向けた児童による器楽合奏の実技指導	質の高い音楽技術の提供、高度な技能の習得、 <u>模倣意欲</u> の <u>誘発</u> 、美意識の触発	技術の上達による満足感、達成感から得られる <u>自己肯定感</u> の向上	②③

3. 研究方法

前述の表1に示されたエントリーポイントに基づいて、音楽ワークショップ型授業を行い、以下の通り、質問紙によるアンケート調査及び半構造化面接調査を実施した。なお、表中のd、f、gについては、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から一部の活動が制限されたため、本研究の調査期間においては実施することができない場合もあった。表中eについては、児童からの質問に音楽家が応える等の試みによって、双方向的なコミュニケーションが図られた。また表中b

の、各鑑賞曲と児童が個々に関わりを持てるように取り入れた楽曲解説や作曲家のエピソード紹介についても、一方的な説明ではなく、質問形式で児童に投げかけを行うなど、各楽曲の合間に児童が発言できる機会を設け、双方向型のコミュニケーションが図られた。

(1) 調査対象

調査① 音楽ワークショップ型授業に参加した小学生2,251名（男子1,083名、女子1,137名、性別無回答31名）

調査②の1 音楽ワークショップ型授業実施校の教員7名

調査②の2 音楽ワークショップ型授業の音楽演奏者5名

(2) 調査期間

調査① 2022年6月～12月迄

調査② 2022年9月～2023年3月迄

(3) 調査手法・内容

調査① 質問紙によるアンケート調査（自由記述を含む6件法）

調査② 半構造化面接調査

1) 音楽鑑賞活動が子ども個人の音楽表現活動にもたらす影響

2) 音楽表現活動がクラス集団にもたらす影響

3) 音楽鑑賞・表現活動が子ども個人、クラス集団にもたらす効果のメカニズム

(4) 分析手法

調査① KH Coder（樋口,2014）¹¹⁾ による定性データのテキストマイニング及びM-GTA（Modified Grounded Theory Approach = 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）（木下,2023）¹²⁾ による定性データの内容分析

調査② M-GTAによる定性データの内容分析

M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）は、質的データに基づき理論を構築するための体系的な方法論である。この手法は木下（2020）¹³⁾ によって提唱され、従来のグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）が抱える実践的課題を克服するために改良されたものである。M-GTAの最大の特徴は、データに忠実な概念やカテゴリーの生成を通じて、分析者の主観性を可能な限り排除する点にある。具体的には、「分析対象者の視点」を重視し、彼らがどのように事象を経験し、理解しているかを明らかにすることを目的としている。分析者は逐語録やインタビュー記録を綿密に読み込み、そこから直接概念を抽出し、それらを整理・統合することで理論モデルを構築する。M-GTAは特に教育、医療、社会福祉といった、人間の複雑な行動や認知を研究対象とする分野で有効である。この手法を活用することで、現場での具体的な問題状況を深く理解し、実践に直結する理論を提示できる。また、理論メモを活用して概念間の関係性を明確化することで、分析の透明性と再現性を高める点も重要である。本研究では、M-GTAを活用して音楽ワークショップ型授業の効果に関する実践的知見を体系的に整理することをめざす。この手法によって生成された理論モデルは、教育現場における実践の効果を高めるための具体的かつ有用な指針となり得る。M-GTAは、単なる分析手法に留まらず、実践現場に寄与する理論構築のための強力なツールであるといえる。

(5) 研究倫理

調査① 質問紙によるアンケート調査

山口芸術短期大学倫理審査委員会の承認（#2）を経て、調査協力者に文書と口頭で研究

目的、調査方法の説明を行い、本人及び保護者に同意を得て実施した。調査は全て匿名で行い、自由記述についても、文章の抽出によって個人が特定されないように配慮した。

調査② 半構造化面接調査

本学倫理審査委員会の承認（#2）を経て、事前に面接内容を調査協力者に連絡し、文書と口頭で研究目的、調査方法の説明を行い、同意を得て実施した。半構造化面接調査は匿名で行い、調査協力者の同意を得て録音し、テキストデータ化した文章の抽出によって個人が特定されないように配慮した。

4. 結果・分析

(1) 調査①：児童へのアンケート調査

児童に対して行った質問紙によるアンケート調査の各項目において、自由記述による回答を求めた結果を以下に示す。

1) Q 1 「音楽会が楽しかった」に関して、自由記述式で回答を求めた「その理由」については、文の数（2,024文）、総抽出語数（17,633語）、異なり語数（860）を分析対象とした。先述のBooth（2009）のエントリーポイント理論を基に、以下のカテゴリーに分類した。

- ▶ 音楽的体験：楽器の音や演奏技術への感動（例：「トロンボーンの音がすごかった」）
- ▶ 視覚的体験：演出や動き（例：「犬が回った」）
- ▶ 親近感のある選曲：知っている曲やアニメ音楽（例：「鬼滅の刃の曲が流れた」）
- ▶ 学びや発見：楽器や音楽の仕組みを知る（例：「楽器の仕組みがわかった」）
- ▶ 感情的共鳴：感動や楽しさ（例：「心が躍った」）

音楽鑑賞活動が楽しかった理由の自由記述文から、特に印象的だったのは、「トロンボーン」を中心とした楽器の演奏に対する興味や驚きである。「トロンボーンでひゅひゅっと音が大きくなるのがおもしろかった」「スライドホイッスルが楽しかった」といった具体的な音や動きに対する反応が多く見られた。また、「犬が回る」「カメが動く」など視覚的な演出と音楽の組み合わせも、子どもたちにとって新鮮で楽しさを引き出す要因だったことが窺える。さらに、「知っている曲が多かった」「紅蓮華や鬼滅の刃の曲が流れた」といった親しみやすい選曲も、音楽鑑賞活動の楽しさを増幅させたようである。加えて、「いろいろな楽器を知れた」「音楽の仕組みを教えてくれてわかりやすかった」という学びに対する満足感や、「音楽がきれい」「プロの演奏がすごかった」といった感動した様子も散見された。子どもたちにとって音楽鑑賞活動は、楽器や音楽への興味を深め、新たな発見を得る貴重な体験となったようである。

2) Q 2 「楽器の仕組みがわかった」に関して、自由記述式で回答を求めた「印象に残ったこと」については、得られたテキストから、文の数（1,909文）、総抽出語数（16,915語）、異なり語数（971）を分析対象とした。Q 1と同様に、Booth（2009）のエントリーポイント理論を基に、以下のカテゴリーに分類した。

- ▶ 音の出し方の学び（例：「トロンボーンは唇を震わせて音を出す」「フルートは空気を二分割して音が出る」）
- ▶ 新しい発見（例：「トロンボーンが息だけでは音が出ないと知った」「オーシャンドラムが初めて見た楽器だった」）
- ▶ 具体的な仕組みの理解（例：「マリンバは叩くマレットで音が変わる」「トロンボーンの

スライドで音が変わる」)

- ▶ 驚きや感動 (例:「バイクみたいな音が出るのが面白かった」「唇の振動で音が出るのが不思議だった」)

子どもたちが楽器の音の出し方を学ぶ中で、楽器の仕組みを具体的に理解している様子が見られた。特に、「唇の振動で音を出す」「空気を分ける」といった基本的な原理についての理解が示されており、音の生成過程を正確に捉えている。また、「オーシャンドラム」や「マリンバ」など、初めて見る楽器に触れた際には、新たな気づきや驚きが多く挙げられている。これらの楽器が子どもたちにとって新鮮で興味を引く存在であったことが窺える。一部の子どもたちは「トロンボーンのスライドの仕組み」や「マリンバのマレットの違い」など、楽器の具体的な構造や動作原理にまで理解を深めている。また、「バイクの音に似ている」「唇を震わせるなんて面白い」といった感想が示すように、楽器の音やその仕組みに対する驚きや感動も記述されている。これらの感情的な反応は、子どもたちにとって印象深い体験となり、学びを豊かにする要因となっている。総じて、子どもたちが楽器の特性や仕組みについて多角的に学び、発見や感動を通じて音楽への興味関心を深めたことが示唆されている。

3) Q 3「作曲家のお話がわかった」に関して、自由記述式で回答を求めた「印象に残ったこと」については、文の数 (1,636文)、総抽出語数 (14,807語)、異なり語数 (1,012語) を分析対象とした。M-GTAによって以下の通り、カテゴリに分類した。

- ▶ 作曲家について (例: ショパン、ベートーヴェン)
- ▶ 楽器について (例: オーシャンドラム、マリンバ)
- ▶ 音楽の印象 (例: きれいな音、楽しい)
- ▶ 歴史や背景 (例: 出身地、編曲)
- ▶ 難易度・理解度 (例: 難しかった、わかった)

「ショパン」「ベートーヴェン」「バッハ」などの作曲家への関心が高く、特に「ショパン」に関連したエピソードへの言及が多く見られた。作曲家の生涯や楽曲の背景を通じて、音楽史への理解が深まったと考えられる。さらに、「ドイツの三大B (バッハ、ベートーヴェン、ブラームス)」や「モーツァルトがオーストリア出身でドイツ語を話していた」など、音楽家の地理的背景や文化に関する情報が印象に残っている様子が確認できた。地図を使った説明がわかりやすかったとの意見も多く見られた。具体的な楽曲としては、「小犬のワルツ」「動物の謝肉祭」「トルコ行進曲」などが挙げられており、特に「小犬がしっぽを追いかける様子」など、楽曲の由来が子どもたちの興味を引きつけた。これらの楽曲を通じて、音楽がどのように生まれたのかというストーリー性が、学びを深める要因となっていたと考えられる。一方で、「難しかった」「わからなかった」という意見も一部存在し、特に作曲家や国名などの専門的な情報が難解だったようである。今後は、具体的な事例や映像を用いるなど、子どもたちがより理解しやすい工夫が求められる。

4) Q 4「楽器を演奏したくなった」に関して、自由記述式で回答を求めた「その理由」については、得られたテキストから、文の数 (1,918文)、総抽出語数 (17,247語)、異なり語数 (865語) を分析対象とした。以下の通り、カテゴリに分類した。

- ▶ 感情的な要因 (例: 楽しそう、面白そう、ワクワクした、演奏者が楽しそうにしていた)

から、自分も楽しみたい、挑戦したい)

- ▶ 音に関する要因 (例:音がきれいだった、迫力があつた、音の仕組みが面白かった)
- ▶ 技術的・挑戦的な要因 (例:難しそうだけどやってみたい、もっと上手になりたい、ダブルタンギングに挑戦したい)
- ▶ 他者との関わり (例:見ている人を楽しませたい、家族や友達に褒められたい、合奏や発表会への意欲)
- ▶ 楽器そのものへの興味 (例:楽器の種類や仕組みに興味を湧いた、特定の楽器(トロンボーン、マリimba、ドラム)に憧れた、見たことのない楽器を演奏してみたい)
- ▶ 音楽全般への興味・影響 (例:音楽が好きになった、演奏を聞いて音楽への興味が高まった)

このように、子どもたちの演奏意欲を高める要因として上記の6つが挙げられる。第一に、「感情的な要因」が大きく影響している。演奏者の楽しそうな様子や音楽そのもののワクワク感が、子どもたちの「自分もやってみたい」という気持ちを引き出している。ポジティブな感情の喚起が演奏意欲を強く後押ししている。第二に、「音に関する要因」である。音楽の美しさや迫力が大きな魅力として作用しており、「音がきれい」「迫力があつた」という記述が多く確認された。音響体験そのものが、子どもたちの興味を引きつけていることが分かる。第三に、「技術的・挑戦的な要因」が挙げられる。「難しそうだけど挑戦したい」といった声が多く、特に「ダブルタンギング」などの高度な技術への興味が目立った。新しいスキルに挑戦したいという意欲が、演奏への興味を深めている。第四に、「他者との関わり」が重要な動機となっている。「周りの人を楽しませたい」「友達や家族に褒められたい」といった意見から、他者との交流や評価を求める気持ちが演奏意欲を高めていることが読み取れる。第五に、「楽器そのものへの興味」である。特定の楽器に対する憧れや「楽器の仕組み」に対する好奇心が、演奏意欲を刺激している。特に「トロンボーン」「マリimba」などに関心を示す記述が散見された。第六に、「音楽全般への興味・影響」が挙げられる。「音楽が好きになった」「音楽に興味を持った」といった記述から、音楽そのものへの愛着が深まり、それが演奏意欲の向上に繋がっていることが分かる。

以上の要因は、感情、技術、好奇心、交流といった多様な側面から子どもたちの演奏意欲を支えており、音楽活動の意義を多角的に示している。これらを踏まえると、子どもたちの興味を引き出すためには、感動や発見を提供する場の創出が重要であると考えられる。

5) Q 5「前よりも音楽が好きになった」に関して、自由記述式で回答を求めた「その理由」については、得られたテキストから、文の数(1,845文)、総抽出語数(17,918語)、異なり語数(911語)を分析対象とした。自由記述文の分析結果から、子どもたちが音楽を「前よりも好きになった理由」は、「音の美しさや迫力」「楽器への興味と知識の増加」「プロの演奏の影響」「曲の多様性と魅力」「共有体験の楽しさ」の5つの要因に大別できる。

まず、「音の美しさや迫力」として、「音がきれい」「迫力があつた」など、音楽そのものの美しさや力強さが、感動を呼び起こしている。これらの体験は、音楽へのポジティブな感情を引き出し、音楽への関心を高める要因となっている。次に「楽器への興味と知識の増加」として、「いろいろな楽器が知れた」「楽器の仕組みがわかった」といった声が多く見られた。特に、普段触れることのない楽器や新たな演奏方法の発見が、子どもたちの好奇心を刺激している。「プロの演奏の影響」としては、「プロの演奏がすごかった」「自分もやりたくなつた」という記述から、専門家による高度な演奏が、子どもたちに憧れや挑戦意欲を与え、音楽への理解を深めるきつ

かけとなっている。「曲の多様性と魅力」としては、「知らない曲を聞いた」「面白い曲がたくさんあった」といったコメントから、幅広いジャンルやリズムを経験することで、音楽の楽しさや新たな側面を発見したことがわかる。「共有体験の楽しさ」としては、「みんなで演奏したくなった」「楽しそうだった」という意見は、他者と共有する音楽体験が楽しさを増幅し、音楽に対する前向きな態度形成に寄与していることを示している。

これらの結果は、音楽鑑賞や演奏活動を通じて、子どもたちの音楽への関心や意欲が多面的に高まることを示唆している。特に、感動や好奇心を引き出す体験が、音楽教育における重要な要素であると考えられる。

6) 自由記述式で回答を求めた音楽鑑賞活動の「気づき」について、得られたテキストから、文の数(2,425文)、総抽出語数(31,440語)、異なり語数(1,668語)を分析対象とした。以下の4つのカテゴリ「楽器に関する気づき」「演奏技術に関する感想」「曲に関する感想」「全体的な印象や感謝の言葉」に分類した。

- ▶ 楽器に関する気づき(例:「トロンボーンは唇を震わせて音を出す」、「マリンバは叩く場所やバチによって音が変わる」)
- ▶ 演奏技術に関する感想(例:「タンギングの速さで音が変わる」、「ダブルタンギングがすごかった」)
- ▶ 曲に関する感想(例:「千本桜がとても良かった」、「キリマンジャロの速さがすごかった」)
- ▶ 全体的な印象や感謝の言葉(例:「音楽が楽しくなった」、「また来てください、ありがとうございました」)

児童の自由記述から、楽器の特徴や音の出し方に対する具体的な気づきが見られる。「トロンボーンは唇を震わせて音を出す」「マリンバの音は叩く場所やバチの違いで変わる」といった感想が示すように、児童は楽器を通じて音を生み出す仕組みへの理解を深めた。このような発見は、楽器そのものへの関心を引き出し、音楽教育において楽器の構造や特性を学ばせる重要性を示している。

「タンギングの速さで音が変わる」「ダブルタンギングがすごかった」という感想から、児童は高度な演奏技術に対して強い関心を抱いたことがわかる。特に「タンギング」「速さ」といったキーワードが多く見られることは、技術的な要素が児童に大きな印象を与えたことを示唆している。このような技術面への関心の喚起は、児童の学習意欲を高め、音楽教育における技能習得の動機づけに寄与するものである。

具体的な楽曲への感想として、「千本桜がとても良かった」「キリマンジャロの速さがすごかった」といった記述が多く見られた。このような感想は、児童が楽曲のリズムやスピード、雰囲気といった音楽的要素に強く惹かれたことを示している。特定の楽曲が児童の印象に残ることは、音楽教育における楽曲選定の重要性を改めて示唆している。

「音楽が楽しくなった」「また来てください、ありがとうございました」といった感想から、音楽鑑賞活動が児童にポジティブな体験をもたらしたことが窺える。「楽しかった」「ありがとうございました」といった感謝や満足を示す言葉が多く見られることから、活動全体に対する児童の高い満足度が確認される。

(2) 調査②：音楽ワークショップ型授業実施校の教員および音楽演奏者への面接調査

半構造化面接調査で得られたテキストをM-GTAを用いて分析を試みた。データが膨大となる

ため、調査協力者12名（教員7名、音楽家5名）の中から、教員と音楽家の各代表の2名分を以下に示す。

① 教員Aのインタビュー結果の内容分析

音楽鑑賞活動の影響

普段は集中することが難しい子どもたちが、音楽が始まった途端に集中し、音楽に没頭する様子が見られた。特に、プロの演奏を聴くことで普段使っている楽器でも音が異なることに気づき、演奏に対する理解が深まった。たとえば、ウッドブロックの演奏が通常の授業では聴けない音質で響き、子どもたちは目を輝かせていた。

音楽を聴く態度の変化

鑑賞を通じて、子どもたちが音楽を静かに聴く態度が身につき、知っている曲を聴くとより興味を持つようになった。教科書に出てくる曲を知っていることが、授業や音楽に対する意欲を高める要因となった。

長期的な影響

生の演奏を聴くことで、音楽に対する興味や感受性が育つ。また、音楽を通して団結や協力が生まれ、クラス全体がまとまる。具体的には、発表会に向けた練習を通じてクラスが一つの目標を共有し、互いに助け合う姿勢が見られた。

教育効果

音楽はすぐに結果が出るものではないが、継続的に鑑賞することで感受性や音楽への関心が育つ。また、音楽を通じて団結力が高まり、表現活動を行うことで自然に学びが深まると考えられる。音楽の表現活動は、鑑賞活動によってインプットされたものをアウトプットするプロセスで、主体的な学びを促す。

音楽活動が与える人生への影響

鑑賞や表現活動を通じて音楽を楽しむことで、子どもたちの感受性や協調性が育まれ、音楽を通じた生涯にわたる豊かな人生が期待できる。

② 教員Bのインタビュー結果の内容分析

音楽鑑賞活動の影響

子どもたちは音楽を聴きながら自然に身体を動かし、楽器の音やその鳴り方に対して強い関心を示していた。演奏を目の前で見ることで、音楽への理解が深まり、音楽鑑賞時に積極的に発言する子どもが増えた。中学校での部活動に興味を抱く子どもも増え、音楽に対する興味が次の段階に進んだ。

個人レベルの変化

子どもたちは鍵盤ハーモニカを初めとする楽器に対する認識を変え、簡単な曲を演奏するためのものと考えていた楽器が高度な演奏にも使えることを知り、驚きを感じた。これにより、子どもたちは自分たちが使う楽器への関心が高まり、今後の演奏への意欲が向上した。楽器演奏の実際の体験が、子どもたちの音楽への理解と意識の向上に繋がった。

授業における変化

音楽の授業では、楽器の音とその見た目を関連付けて理解する力が向上し、音楽鑑賞の際にもその経験が活かされ、音の聴き分けができるようになった。特に、目の前で演奏を見ることが、子どもたちの理解を深めるために非常に効果的であることを確認できた。

クラス集団への影響

合唱や合奏を通じて、クラス全体で心を合わせて取り組むことの重要性が子どもたちに伝わ

り、協調性が高まった。特に、歌唱時の姿勢や声の出し方などを実際に体験することで学んだことが、クラス全体の一体感や共同作業の喜びへと繋がった。これにより、クラス全体の団結力が強化され、音楽活動を通じて集団としての成長が促進された。

メカニズムと効果

素晴らしい音楽を目の前で聴き、演奏に触れることで、子どもたちの音楽的な感性が高まり、音楽活動への意欲が向上した。楽器に触れることや演奏する機会への期待感が高まり、音楽に対する関心がさらに強くなった。

③ 音楽家Aのインタビュー結果の内容分析

子どもの反応の多様性

音楽鑑賞活動において、子どもたちの反応は非常に多様であった。たとえば、ドラムの音が大きい曲にもかかわらず、最前列でぐっすり眠る子どもがいれば、興味がなさそうな子どもが質問や意見を積極的に発言することもあった。傾向としては、低学年の子どもたちは最初から興奮して入ってきたが、高学年になると最初は冷めた態度を見せたことがあった。しかし、演奏を聴くうちに、だらけた表情だった子どもが、自分でも意見を言えると感じるようになると、表情が変わり、楽しそうに見える瞬間が増えた。

自由な鑑賞の重要性

一部の学校では、音楽鑑賞の際に「静かに聴くこと」が強要され、子どもたちは黙って座っていることを求められていた。しかし、演奏者からすると、この静寂の強制が自然ではないことが多いと感じる。特に、手拍子をしていても良い場面では、その自由さが欠けていると感じることがあった。子どもたちが自由に反応する機会を与えられないことで、音楽に対する本来の楽しさが抑制されてしまい、感情表現の機会を失ってしまうのはもったいないことである。

自由な鑑賞の重要性

音楽鑑賞活動は、子どもたちに自由な反応を促すことが大切である。手拍子をしてもいいし、身体を動かしてもよい。これによって、子どもたちが自ら音楽に対して積極的に関与できる環境を提供することができる。特に、幼い子どもたちがいる場では、音楽鑑賞の場でも自由な動きが許される環境があり、それが子どもたちにとって心地よい音楽体験を生み出す。大人たちもそうした自由さを理解し、共感することが大切である。

音楽を通じた表現の自由と自己肯定感

子どもたちが音楽に対して自由に反応し、感じたことをそのまま表現することを促すことが重要である。音楽には正解がないため、子どもたちが感じたことが正しいと認め、それを肯定してあげることで、自己肯定感が育まれる。表現に対して否定的なフィードバックを与えるのではなく、感じたままを表現することを奨励し、そのプロセスを尊重することが、子どもたちの音楽体験をより豊かにする。

音楽とコミュニケーション能力の向上

集団での音楽活動、たとえばアンサンブルや合唱は、他者との協調性やコミュニケーション能力の向上に寄与する。子どもたちは他の人の音を聞きながら、自分の音をどのように表現すべきかを考える。これによって、自然とコミュニケーションのスキルが磨かれる。音楽活動では、単に技術を学ぶだけでなく、音楽を通じて他者とつながり、共同でひとつの作品を創り上げる経験が大切であり、それが人間関係の構築にも役立つのである。

教育効果としての音楽鑑賞・表現活動

音楽鑑賞活動を通して、子どもたちの心が揺れ動き、その感情が次の表現活動に影響を与える。音楽に感動したり、楽しんだりする経験が、表現する意欲を生み出し、次のステップへとつ

ながる。音楽を通じて心が動く体験は、日常生活でも「これをやってみたい」「楽しい」といった感情を引き起こし、その感情が新たな挑戦や表現の原動力となっていく。

体験の重要性

コロナ禍での音楽活動の制限は、子どもたちにとって大きな損失であった。音楽は体験を通じてこそ学べるものであり、体験を失うことは大きな学びの機会を失うことに等しい。体験を通じて、子どもたちは音楽の楽しさを実感し、それが自己表現や新しい挑戦へとつながるため、音楽教育において体験型の重要性が求められる。

環境の影響

音楽を学ぶ環境が、子どもたちの成長に大きく影響する。特に発達障害を持つ子どもたちにとって、自由で柔軟な環境があることで、音楽を楽しむことができ、自己表現の場として音楽が役に立つ。環境が整わないと、音楽への興味や能力が十分に発揮できない場合もあり、適切な環境づくりが音楽科の教育においても重要である。

音楽鑑賞活動と表現活動の連動

鑑賞活動と表現活動は切り離せないものであり、音楽を聴くことが表現する意欲を育て、表現することでさらに音楽に対する理解や興味が深まる。鑑賞から表現へのスムーズな移行ができるよう、子どもたちが自然と音楽に対して感じたことを表現できる場を提供することが求められる。音楽教育においては、技術を教えるだけでなく、子どもたちが心から音楽を楽しみ、自由に表現できる環境を整えることが最も重要であり、その結果、音楽が子どもたちの自己表現やコミュニケーション能力の向上に寄与するのである。

④ 音楽家Bのインタビュー結果の内容分析

子どもの反応の違い

低学年の子どもは、知っている曲に対して自然と反応しやすいが、高学年になると反応が控えめになる傾向が見られた。低学年の子どもたちは、知っている曲が流れると自然に身体を動かしたり、口ずさんだりしていた。これは反応がダイレクトで、抑えがないためである。しかし、高学年になると、曲を知っていても表情や態度に反応が出にくくなる。これは、静かに聴かなければならないという意識や、自分の感情をコントロールする意識が強くなり、素直な反応が少なくなることが要因として考えられる。

知っている曲の効果

子どもは教科書に掲載されている曲や過去に演奏した曲に強い共感を示し、感情を表に出しやすい。特に、自分で演奏した経験がある曲の場合、身体全体で反応し、「やったことがある」という安心感や喜びが表情に表れる。音楽鑑賞では、全く知らない曲よりも知っている曲の方が反応良く、音楽会などでは、学年に応じて適正な曲目の選定が重要である。

生演奏の重要性

CDや録音ではなく、目の前で生演奏される音楽は、子どもたちに対して大きなインパクトを与える。特に、演奏者が音楽に真剣に向き合い、全力で演奏している姿を見ることで、その情熱や感情が直接子どもたちに伝わりやすい。これは、生の音楽の最大の魅力である。

音楽鑑賞の限界と効果

音楽を鑑賞したからといって、すぐに「自分も楽器を演奏してみたい」という気持ちになる子は少ないかもしれないが、音楽が楽しいものだと感じることは、間違いなく伝わる。楽器を演奏するためには、環境や物理的要因、たとえば家にピアノがあるか等が影響するため、すぐに実践に移せないこともあるが、音楽が楽しいものであることは伝わる。

舞台経験と自信

舞台上で演奏する経験は、子どもにとって大切な自信を育むことができる。人前で演奏することは強い精神力を養い、困難な場面を自分の力で乗り越える力を習得する貴重な機会となる。この経験は、音楽だけでなく他の人生の場面でも役に立つスキルとなり、特に舞台における一人での演奏経験が、自己の成長にも繋がる。

音楽と集団活動の影響

合奏やクラス全員での音楽活動は、集団の一体感を育む。たとえば、リコーダーや合唱など、呼吸やリズムを合わせる活動を通じて、子どもたちは「みんなで一つのものを作り上げる」という達成感を感じることができる。音楽活動は、集団の雰囲気や心を穏やかにし、集団全体の一体感を高める効果が期待される。

音楽鑑賞と表現活動の相互作用

音楽を鑑賞し、さらにその音楽を自ら表現するというプロセスは、子どもたちに深い影響を与える。鑑賞するだけでなく、自分で表現することで、音楽の魅力をさらに感じることができる。その際、演奏者の集中力や情熱が子どもたちに伝わり、心に残る体験となる。

技術よりも感情の伝達

技術的に完璧な演奏であっても、それだけでは人々を感動させることは難しい。感動を引き起こすのは、演奏者が音楽に込めた感情や人生経験が音楽に反映されているかどうかである。自動演奏などでは完璧な演奏が可能だが、そこには演奏者の感情や情熱が込められていないため、感動が生まれにくい。

演奏の姿勢と感動の伝達

子どもたちは、演奏者が真剣に音楽に向き合う姿を見て、音楽に対する情熱や集中力を感じとる。その姿勢こそが、言葉で伝えるよりも大きな影響を与える。子どもたちにとって、演奏者の姿勢や情熱を直接感じとることが、音楽鑑賞の本当の意味での学びとなり、子どもたちの成長に繋がる。このように、音楽鑑賞や表現活動は、子どもの感情に直接働きかけ、個人の成長や集団のまとまりに影響を与える力がある。

5. 考察

本研究では、音楽ワークショップ型授業が児童に与える教育的効果を多角的に検証し、アンケート調査と半構造化面接を基にした量・質的分析を行った。その結果、以下のような重要な知見が得られた。

(1) 音楽ワークショップ型授業の学習効果

アンケートの自由記述文の分析から、児童が鑑賞活動を通じて音楽的感性や興味を深めたことが確認された。特に、「楽器の仕組み」や「音楽の美しさ」に対する具体的な気づきが多く見られた。これにより、音楽ワークショップ型授業が単なる音楽鑑賞にとどまらず、学習者が主体的に音楽を理解し、楽しむ機会を提供していることが示唆された。また、児童が「楽しい」「もっと演奏したい」といった感情を抱いたことから、音楽が感情的満足感を伴う学びの体験であることが示された。

(2) 音楽鑑賞と表現活動の相互作用

インタビュー調査から、音楽鑑賞が表現活動への意欲を喚起し、それがさらに鑑賞体験を深めるという双方向的な効果が確認された。特に、実演奏を目の前で体験した子どもたちは、音楽への興味や感受性を高めると同時に、楽器演奏への挑戦意欲を抱く傾向が強かった。これらの結果

は、音楽鑑賞と表現活動の連携が、子どもたちの主体的な学びを促進する教育的価値を持つことを示している。

(3) 教育現場における音楽ワークショップの意義

教育現場において、音楽ワークショップ型授業は学習者の関心や感受性を引き出し、音楽的スキルの向上だけでなく、協調性や表現力の発達にも寄与することが明らかとなった。特に、プロの演奏家が講師を務めることによる「生の体験」は、児童の音楽への態度変容に顕著な影響を与えた。また、教師との事前打ち合わせにより授業内容を児童のニーズに合わせて柔軟に調整することが、効果的な授業設計に重要であることが示唆された。

(4) 仮説モデルの妥当性

本研究で構築した音楽ワークショップ型授業の効果を示す仮説モデル(図1)は、アンケートおよび面接調査から得られたデータによってその妥当性が確認された。このモデルは、児童の音楽鑑賞から表現活動への一連のプロセスを理論的に説明し、音楽教育の実践的改善に資する指針を提供するものである。特に、感情的共感と学びの相互関係が、児童の内面的成長に大きな影響を与えることが明らかとなった。

(5) 研究の限界と課題

本研究の調査期間において、新型コロナウイルス感染拡大による一部活動の制限が研究に影響を与えた可能性は否定できない。また、質的データ分析の主観性を完全に排除することは難しく、さらなるデータの蓄積と分析が必要である。加えて、長期的な教育効果の検証が今後の課題である。

6. 結論

音楽ワークショップ型授業は、音楽的学習体験を通じて児童の感性や表現力を育成し、主体的な学びを促進する教育的価値を持つことが本研究により示された。本研究の成果は、音楽教育の現場における実践改善に貢献するとともに、今後の音楽アウトリーチ活動の発展に向けた基盤となるものである。

謝 辞

本研究は、JSPS科研費(研究種目:基盤研究(C)一般、課題番号:22K02591、研究課題名:「音楽ワークショップ型授業の効果とそのメカニズム」)の助成を受けて実施されました。また、長期間にわたる研究の遂行にあたり、ご協力いただいた児童の皆様、音楽ワークショップ型授業を実施された学校の教職員の皆様、さらにプロの音楽家の皆様をはじめとする調査協力者の方々に対し、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1 小野隆洋・岩中貴裕. (2024). 「音楽ワークショップ型授業が児童に与える影響——アンケート調査結果に基づく分析と考察——」『JAILA JOURNAL』, 10, 41-53.
- 2 中野民夫. (2001). 『ワークショップ——新しい学びと創造の場——』岩波新書.
- 3 宮原浩二郎. (2009). 「社会美学のコンセプト(2)エレン・スカリー『美と正義について』をめぐって」『関西学院大学社会学部紀要』, 107, 73-86.
- 4 新原将義. (2017). 「ワークショップ型授業における教授・学習活動の対話的展開過程」『教育心

- 理学研究』, 65, 120-131.
- ⁵ 林睦. (2002). 「学校教育における音楽家活用の調査研究」『文化経済学』, 3(1), 85-90.
- ⁶ 河添達也・小川彩由子. (2010). 「鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究」『教育臨床総合研究』, 9, 169-178.
- ⁷ 坪井眞里子. (2018). 「鑑賞授業におけるライブ性を考える——表現活動への繋がり」『名古屋女子大学紀要 家政・自然編 人文・社会編』, 64, 179-190.
- ⁸ 上村有平・小野隆洋. (2021). 「音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果——感想文の分析から——」『山口芸術短期大学紀要』, 53, 15-27.
- ⁹ Booth, E. (2009). *The Music Teaching Artist's Bible: Becoming a Virtuoso Educator*. Oxford: Oxford University Press. (久保田慶一訳 (2016). 『ティーチング・アーティスト 音楽の世界に導く職業』 東京：水曜社.)
- ¹⁰ 久保田慶一 (2019). 『新しい音楽鑑賞 知識から体験へ』 東京：水曜社
- ¹¹ 樋口耕一. (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——』 ナカニシヤ出版.
- ¹² 木下康仁. (2023). 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて——』 弘文堂.
- ¹³ 木下康仁. (2020). 『定本 M-GTA——実践の理論化をめざす質的研究方法論——』 医学書院.